日本語教師の板橋先生とその教え子のLee Dongminさんとのインタビュー

学生同士の学び合いを支える授業づくり

このインタビューはAPUでの日本語学習プロセスを調査するために行いました。私たちは日本語の授業方法や、教員と学生が教え方や学習プロセスに関してどのように考えているのかについて知るために、APUの日本語教師である板橋教授とその教え子であるLee Dongminさんにインタビューをしました。

板橋民子先生

Lee Dongminさん

Q. 自己紹介をお願いします。

Lee Dongminさん:　韓国出身、APM(国際経営学部) 2回生のLee Dongminです。
板橋先生：　板橋民子です。日本語の教員をしています。

Part 1:授業内活動

Q. 日本語の授業で一番好きなところを教えてください。

Lee Dongminさん:　日本語の授業で一番好きなところは、週に１回、自分が新しく学んだ言葉について、その意味とどこで習ったのかを共有する時間があったところです。そこではリフレッシュしながら、新しく学んだ言葉について友達と共有することができました。

板橋先生： 私が日本語の授業で好きなところは、クラスには色々な地域から来た学生がいるので、地域ごとに考え方の比較が出できたり、新しい価値観を感じられたたりすることです。またセメスターごとに学生の日本語力が成長する姿を一番近くで見られることも日本語の授業を行うなかで好きなところです。

Q. (Lee Dongminさん) 板橋先生の授業の雰囲気はどうですか？また、板橋先生の授業からどのような影響を受けましたか。

Lee Dongminさん: 授業の雰囲気としてはとても自由な感じでした。先生もクラスメート同士で話し合うことを大切にしていたので、授業は学生が自ら学び続けるという雰囲気でした。先生の授業については、論理的に説明をしたり、作文を作成できるようになったりすることを大切にしていたと思います。課題には、テキストを読んで批判的な質問を作ってくるというものがあり、論理的に質問を作成することによって、批判的な思考力も育ちました。

Q. それは興味深いですね。Leeさんが言及した批判的な思考については、どのように考えていましたか？

板橋先生： 批判的な思考については、どういうことができるとクリティカルシンキングであるといえるのかについて考えていました。そのなかでいくつかの文献を読み、読んでいるものや人が話していることに対して、いろんな疑問を持てるということが具体的な行動の一つだと考えました。そこからは批判的な質問を作る課題を出したり、根拠について考える機会を作りました。特に自分が考えたことに対して、どういう根拠を使えばそれが強い主張になるのかということを最終的には学生が自分で理解できるように、学生同士でディスカッションしました。

Q. (Lee Dongminさん）板橋先生の授業で印象に残っている課題や活動は何ですか？

Lee Dongminさん: 印象に残っている活動は探求活動です。これは授業のトピックのなかから自分が興味があることについて、深く研究してクラスメートの前で発表するものです。そこで自分はJR九州をテーマとして研究し、JR九州のチケットは、韓国の電車のチケットと比べてなぜ高いのかについて経済的な観点から考えました。それ以降、JRの会社について関心を持ち続けています。

Q: (板橋先生) 研究活動のテーマは自由に決めることができるのですか？

板橋先生： 完全に自由ではないのですが、授業のなかで観光や言葉、あとは児童労働といった６個ぐらいのトピックを扱うので、そこから自分の専門に関係のあるトピックを選ぶ人もいれば、趣味に関係があるトピックを選んで進める人もいました。

Q: このような授業を行うなかで工夫していた点を教えてください。

板橋先生： 学生は教科書を選ぶことはできませんが、授業に関してどんな事をするのかはできるだけ学生が選べるようにしていました。宿題も自分で選んでできるようにしたり、探求活動もトピックはこの範囲で自分が好きなものを選んでやってくださいというような感じにしたりしていましたね。やっぱり授業評価アンケートを見ても、自分でやりたいことを選べたことが良かったというふうにコメントをする人がものすごく多かったです。

Q: (板橋先生) 学生が上級クラスまで進めるようにするために、学生のモチベーションをどのように高めていますか。

板橋先生： 私は、最近は中級クラスを担当しています。そのなかで〝中級の学生が上級クラスまで進めるように"ということはあまり考えていなくて、学生はそれぞれ目標が違うので、その目標達成のためにできる情報の共有をしようと思っています。そのなかで将来、キャリアの取得やJLPT(日本語能力試験)の受験、日本語開講クラスの受講を考えている学生には日本語上級クラスを勧めることもあります。

Q: 日本語上級クラスを受講しようと思った理由と具体的な目的を教えてください。

Lee Dongminさん: APUに来てから日本のことがさらに好きになり、APUを卒業した後も日本に住み続けたいと思いました。そこで、将来的に日本で就職活動をし、働くためにはコミュニケーションスキルが必要である、と考えたので日本語上級のクラスを取りました。その他の目的としては、日本語開講の授業を取る前に読解やリスニングといったアカデミックスキルを学びたかったからです。

Q: なぜ日本を好きになったのですか?

Lee Dongminさん: APUに来る前は日本に対して平和なイメージを持っていました。実際にAPUに来てからは、日本という社会がかなり珍しいことに気が付きました。平和的であることに加えて、経済的に成長しつつ国民性も優しい、そういったところに魅力を感じたので日本を好きになりました。

Part 2: 課外活動

インタビューの注釈： Self-Access Language Center（SALC）では、日本語教師（今セメスターは板橋先生）による毎週2回、30分間の会話練習をはじめ、日本語（および他の言語）を学ぶ学生のためのさまざまな言語サポートを提供している。

Q: (板橋先生) SALC のコーディネーターとして、また APU の日本語教師として、学生の日本語力を向上させるために必要

なことは何だと思いますか？ 日本語の学びのためにどの課外活動はどのように重要だと思いますか。

板橋先生： 日本語力を向上させるために必要なことは、日本語を使って学習者から言語ユーザーなることだと思います。そして自分で日本語学習を振り返り、メタ認知をして自分に何が必要なのかということを考えられる人になるというのが言語力の向上にとって大事なことだと思います。また課外活動に関しては、自分がやりたいことをやるということが大切だと思います。例えば、就職活動などのためにするのではなくて、自分の興味にもとづいてやりたいと思うことを表面的にじゃなくて深く関わってやってほしいなと思います。

Q: (Lee Dongminさん) SALC を使ったことありますか。また、授業外にどのようにして日本語勉強していますか。

SALC

Lee Dongminさん: SALCは3、4回ぐらい使ったことがあります。そのときは自分が作文したものを添削してもらったり、ドラマのセリフの意味を質問するなど会話面でも助けてもらったりしました。今はなるべく日常的に日本語に囲まれて生活したいと考え、日本語で新聞を読んだりPodcastを聴いたりしています。YouTube、お笑い番組などもとても面白くて、楽しみながら言葉や表現についても学んでいます。また今は日本語開講の授業も取っていて、そこでは授業内容はもちろん、日本語も勉強しています。

インタビューの注釈：Language Festivalとは、APUで学生数が少ない国の出身学生が講師となり、自国の文化や歴史、価値観を表す言語を紹介する1日イベントである。2023年10月28日に開催されたLanguage Festivalは、APUで3度目の開催となった。

Q: 2023年10月28日に行われたLanguage Festivalについて教えてください。

板橋先生： 私は今回、Leeさんと英語科教員の衛藤智子先生と一緒にLanguage Festivalの運営をしていました。Leeさんは私の中では学生だという認識ではなく、同じプロジェクトを進めたスタッフの一人という感じで尊敬しています。自分が新たに学んだ言語で年上の大人と一緒に活動ができるというのは素晴らしいことであり、Leeさんにとっても日本語を使ってこのプロジェクトを動かせたということが大きな自信になったんじゃない

かなと思います。

Lee Dongmin さん：　今回のLanguage Festivalでは学生の立場ではなくコアスタッフとして、自分から何かを人に教えたり誘導したりする必要がありました。日本語で説明しなければならない場面では、わかりやすく人に伝えることの難しさを感じました。

板橋先生：　こういった感じで自分が日本語を使うために何かをするというのではなくて、今回のように〝一緒に何かプロジェクトをしながら、日本語を使うこと"がそのプロジェクトを行う上での一つの手段になっていたことが嬉しいな、と思いました。また言葉の問題でこういうイベントに誘ってもちょっと怖いというような人もいますが、Leeさんのように必要な時に必要な言語で対応できるということは本当に素晴らしいことだな、と思いました。

APU Language Festival

Q: Language Festivalの運営に携わろうと思ったきっかけなどがあれば教えてください。

板橋先生：　私は、衛藤先生から"APUのなかでも希少国出身の学生たちが、自分達の母国語を人に伝えることによって、その国や母国語に対しても誇りを持てるチャンスになるのではないか"と考え、Language Festivalを企画しているということを聞きました。私は日本語の授業のなかで学生に色々な国についてプレゼンをしてもらう機会は沢山ありますが、意外と言語の授業以外の場所で彼らがそういうことを発信する機会はないのかな、思い運営に携わることに決めました。

Lee Dongminさん:　2022年はCampus TerminalでLanguage Festivalのお知らせを見て、面白そうだなと思い、スタッフとして参加しました。そこでスタッフを経験してからは、もっといろんな人にこのイベントの魅力を感じてほしいなと思い、2023年はコアスタッフとして参加することにしました。そこには、自分がどれくらいマネジメントができるのかチャレンジしてみたいという気持ちもありました。

APU Language Festival

Language Festival本番のLeeさんのMCはとても上手でした。MCの準備をするうえで大変だったことを教えてください。

Lee Dongminさん:　セリフを板橋先生に添削してもらったときには、人前に立って話すときの言葉遣いについての間違えが多かったです。具体的には、人の名前のイントネーションや、漢字の訓読み・音読みの識別が難しかったです。これは大変だな、と思って練習していたんですけど、そのなかで日本語のネイティブレベルにはまだまだ届かないなと思いました。

板橋先生：　だけどLeeさんは本当に日本語が上手なんですよね。普通に話しているときにLeeさんの日本語を訂正することはほとんどないんですけど、MCとして人の前に立って話すというときには少し気になる部分もありました。その部分を今回はLeeさんに伝えられる機会になったので、それはすごくよかったなと思います。

Part 3: 結論

Q:　(板橋先生) 学生が日本語学習へのモチベーションを上げるためにどのようなことをしていますか？

板橋先生：　日本語学習を楽しいと思ってもらうことが日本語学習への一番のモ

APU Language Festival

チベーションになると思います。やはり新しい言語を学んでコミュニケーションを取り、それが相手の人に通じたときって楽しいですよね。そして自分が担当している中級のクラスの学生からは、日本語で話すのがすごく怖いという声も聞くんですけど、失敗を恐れないで勇気を出して言葉にしてみる、それは楽しいんだということを少しずつ積み重ねていってほしいなというふうに思っています。

Q: (Lee Dongminさん) 日本語の授業でどうやって学習習慣を維持していますか。

Lee Dongminさん: 日本語上級のクラスでは日本語で話す機会をもっと増やすために、積極的に授業に参加しディスカッションをして、手を挙げて発言することを習慣にしました。また授業内で日本語をたくさん身に着けようと心がけていたので、授業でわからない単語や新しい表現を学習したときにはそれをメモに取り、あとでメモを見ながら復習して覚えるようにしました。

Q: (板橋先生) 日本語教育を行うなかで、先生にとって重要なことは何ですか？

板橋先生： 最初は〝どうやって新しい言葉をうまく導入するか"が一番大事だと思っていました。でも今は、〝学生に自発的な学びを身に着けさせること"や、〝クラスの中で共同学習の環境を作ること"が大事だと思っています。ですから教員が全てを説明する授業の形ではなく、学生同士が学び合う形をとっています。また、学生にプレッシャーをかけないで日本語を話してもらうために、最近ではいくつかの試みを授業のなかでやっています。

Q: いくつかの試みとは具体的にはどのようなものですか？

板橋先生： 上級クラスでは、「ヒューマン・ライブラリー」と称して、学生自身が「本」になったつもりで、自分の過去の悩みや葛藤などといった、個人的な体験を学生に共有してもらっています。この授業を行うときには、学生を「本」の役をやる人、執筆者、聞き手と3つのグループに分けています。執筆者のグループは「本」の内容を魅力的に要約し、聞き手のグループは要約を読んで気に入った「本」を選びます。また、「本」の内容を聞いて質問をし、インタビューを行います。これにより、お互いの理解が深まり、その後のディスカッションでも自分の意見や気持ちをオープンにしやすくなることを期待しています。今まで隣に座っていたクラスメートにもいろんな思いや過去があり、この人の意見はそういう背景から生まれているんだなと寄り添えるようになったとインタビューで答えてくれた学生がいました。

Q: (板橋先生) 先生の授業を受講する学生には、どのようなことを期待していますか？

板橋先生： 中級の学生に期待することは〝日本語を嫌いにならないでね"という

ですかね。日本語中級クラスは必修のクラスなので、取らなければいけないから取っている学生というのも多いんです。その中で少しでも楽しんで前向きになれるように、また授業の履修が終わってからも日本語を学びたいと思ってもらえるようにしたいなと考えています。上級の学生に関しては、日本語を使って社会的な情報について学んだり、友達と話してみたりしてほしいですね。特にAPUの日本人の学生がどういったことを考えているのかを知るためにも日常的な会話だけでなく、様々な価値観が交換できるような対話につなげていってほしいなというふうに考えています。

板橋民子先生、 Lee Dongminさん と ALRCS メンバー

インタビュー感想 通訳

インタビュアー＆ライター

名前：神門美羽
学部：APM
出身：日本
メッセージ：私が今回のインタビューで印象に残ったことは 2 つあります。1 つ目は言語を学ぶ際には、日々の生活なかに自分が学習している言語を取り入れることが大切であるとい うことです。そのためにも、日常的に友達と英語で話してみるなど言語ユーザーにな ることがとても重要であることを実感しました。また、私が今回のインタビューで印 象に残ったことの 2 つ目は、板橋先生の学生の意思を尊重した授業についてです。探 究活動でも学生の自主性に基づいて内容を決められることは、日本語を学ぶモチベー ションにもつながり、日本語を通して他の学問も学べる良い機会だなと思いました。

インタビュアー

名前: グエン キエウ チー
学部: APM, 会計・ファイナンス
出身: ベトナム
メッセージ : 日本語で行われるインタビューに参加したのは今回が初めてでした。日本語学習者として、日本語を教える教員と日本語を学ぶ学生から異なる視点をインタビューを通し学ぶことができ嬉しかったです。また、板橋先生とLee Dong-minさんは自分たちが使っている言語に対してとても意欲的であり、そのメッセージを他の日本語学習者にも伝えたいと思っていることに感銘を受けました。板橋先生はいつも温かく思いやりがあり、私がAPUで出会った日本語教員の中で最も献身的な先生です。Lee Dong-minさんは日本語学習へのモチベーションが高く、母国語ではないにもかかわらず、日本語と密接なつながりがあります。言語学習に関しては、先生と学生のどちらもが本質的な価値観を持っています。：
1.楽しみながら日常生活に日本語を取り入れること。
2.言語学習については他の人の視点も尊重し、意見を押し付けないこと。
3. 言語を通して意見を伝えたいということ。
今回のインタビューを通して、私は先生と学生から多くのことを学びました。そして日本語を勉強して、優れた日本語を話せるようになりたいというモチベーションを得ることができました。

Q とは

APU で素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃい ますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ること が出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタ ビューをして授業の工夫を教えてもらいたい、ということで始めた取 り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高め るための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」を なす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業 の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。